

して蘇えた今、「幻滅によるむかつき」を何度も味わう。しかし雄鷄の中にうねる生命の波を見ているうちに、新生への決意は固まっていくのである。その新生とは、ロレンスが求める理想の形になるはずのものである。つまり、それは他者との均衡のある生活であり、他者への干渉や強要のない生活、受け取りすぎたり与えすぎたりという過多のない生活である。そしてそのような生活は、「死ぬ」という経験をすることによって可能になるのである。死んだ男は、「死んだ」ということが強調されていて、常に“The man who had died”と書き表されているように、「死ぬ」経験をしたことにより悟りを開いたのである。処刑される前の彼は、ただ与えるだけで受け取ることを知らない人間であって、「言葉」だけの精神的な生活を送っていた。だが今や彼は「死んだ」ことによって自らの限界を知ったのである。その限界とは、自分の領分は自分の皮膚の範囲内であるということである。つまり彼の肉体の強調である。「言葉」というものは、どこまでも飛んでいくおせっかいなブヨなのである。このようにこの作品でも、ロレンスは他の作品と同様に「肉体」の強調をしている。汚れて愚かな口バのような百姓夫婦は「死んだ」ことがないため再生もない。彼らには気品がなくて彼らの買っている雄鷄よりも劣っていると死んだ男には思われる。

旅立ちが出来るほどに傷が癒えた男は、雄鷄をもらって旅に出、途中で雄鷄を自由な世界に放つてやる。雄鷄が自分の王国を手に入れたことは、死んだ男も異教の世界（レバノンの近く）へ行って運命の女（アイシスに仕える巫女）と出会い、愛し合うことの伏線になっている。アイシスの女は、死んだ男と同様に、愚かな奴隷などの周囲の人間とは異質の存在である。第2部の冒頭で、奴隷の子どもたちが料理しようとしていた白い鳩が逃げて飛び去る。この鳩の逃亡が第1部の雄鷄の逃亡に対応していて、アイシスの女の夢が実現することの伏線になっている。

以上に述べてきたように、雄鷄はロレンスの中編『死んだ男』において、重要な意味を持っている動物である。

ロンドンの第一印象

元 経営学部
安藤 聡

ロンドンへの玄関口はたいていの場合ヒースロウ空港である。ロンドンの中心部から西におよそ25キロのところにある、世界的に見ても中心となるハブ空港のひとつだ。日本から英国へ向かう場合、よほど特殊な経路を取らない限りこの空港に着陸することになる。ロンドン中心部までは地下鉄ピカディリー・ラインで約40分、バスやタクシーで一時間、あるいは運賃は恐ろしく高いがヒースロウ・エクスプレスでパディントン駅まで15分である。

私が初めてロンドンに行ったのは1990年の夏だった。その頃はまだ、ヒースロウ着でない日本からの航空便もわずかながら残っていた。単に安かったからという理由で私が選んだのはソウル経由の大韓航空便だったが、これはロンドンから南に約40キロのガトウィック空港に着陸した。ガトウィックの方がロンドンへの距離も長いので、空港からの交通費も余計にかかるのだが、今思えばロンドンへの最初の入口としてこの空港を利用できたことは僥倖だったと言える。この後一年もしないうちに、大韓航空やヴァージン・アトランティック航空を含め日本からの主な便はすべてヒースロウ着になったのである。

ヒースロウからロンドンまでの車窓風景は割と単調である。地下鉄やヒースロウ・エクスプレスの場合、初めのうちは地下を走っているが、地上に出ると典型的なロンドン西郊の住宅街が延々と続く。地下鉄の場合は、ロンドンの中心に近づくたびに再び地下に潜る。バスやタクシーの場合にも、いかにも空港らしい景色が終わると普通の住宅街

になり、やがてハマースミス、アールズ・コート、ノッティング・ヒルそしてサウス・ケンジントンといったあたりから本格的にロンドンに入ることになる。そのまま進めばハロッズやハイド・パークの前を通る。いずれの場合も、それはそれでロンドンへのイントロダクションとして非常に正しいものであり、世界のあちこちから来た人々の多くはこのような形でロンドンとの初対面を果たすのだ。

だが、ガトウィックからの車窓風景は違う。空港からガトウィック・エクスプレスでロンドンに向かって北上すると、ホーリー、レッドヒル、クロイドンといった町を順に通過することになるが、これらの町と町の間にはサリー州の典型的な田園風景が広がっている。映画や写真で見たあのイングランド（南部）の風景そのものである。羊や馬が戯れている姿も見える。初めて乗車したガトウィック・エクスプレスが走り始めるとすぐに、線路際を狐の親子が歩いていたので感激したことを覚えている。この空港直通列車は途中駅には止まらないので駅の様子を見ることは出来ないが、駅の前後にはなだらかな丘の斜面にヴィクトリア時代的な、あるいはもっと古そうな、統一美を誇る住宅街がどこまでも続いている。時刻はちょうど太陽が傾き始める頃だったので、美しい夕景を心ゆくまで鑑賞することが出来た。

このようにしてイングランドの第一印象を楽しませてくれたガトウィック・エクスプレスはやがて、クラップム・ジャンクションというプラットフォームが20本以上ある大きな駅を通過する。名作映画『小さな恋のメロディ』のラストシーンで、トロッコで駆け落ちするダニエルとメロディに向かって悪友オーンショーが「クラップム・ジャンクションで乗り換える」と叫ぶ、あのクラップム・ジャンクションだ。ここはロンドンの複数のターミナル駅からイングランド南部の各地へ向かう線路が交わる、いわば放射線の中心に当たる駅であり、「ジャンクション」という名前が示すとおり有名な「乗換駅」なのである。明治末期から昭和中期にかけて活躍したジャーナリストの長谷川如是は閉はこの駅の様子を、「八方から落ち合う近郊

の路線が、饅頭屋が軋んだように纏れ合っている」と描写している（『倫敦！ 倫敦？』岩波文庫）。

さて、ここからがいよいよ本格的なロンドンだ。何本もの線路が併走するが、その両側はディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』の世界を思わせるような古い長屋が続いていたりする。

程なく車窓右手に奇妙な建造物が見える。これはバターシー火力発電所の廃墟だ。屋根の四隅に長い煙突が建っているのも非常に目立つ。その先はテムズ川を渡る古い鉄橋で、列車はこのあたりで速度を落とすのでテムズの夕景をしばし楽しむことが出来る。そして列車は煤けた車両工場の裏地のようなところに入り込んで行くが、実はこれは工場でも車庫でもなくロンドンのヴィクトリア駅なのである。ガトウィックからの30分足らずの快適な汽車旅はこうして終わる。

なお、私はその後何度も英国を訪れ、ロンドンやその周辺の地理をある程度把握しているから今このように具体的な地名を挙げながら話をすることが出来るのだが、最初にガトウィックから列車に乗ってロンドンに向かったときにはもちろん、ここに挙げたような地名は認知していなかった。そして、当時の私の先入観では、先進国の首都というのは高層建築が林立している大都会のはずであった。いつまで経っても車窓に高い建物が見えないので、列車がヴィクトリアに近づいても私はそこがロンドンだとは夢にも思わなかったのである。テムズ川を渡ったときにも、風格のある川だとは思ったがそれがテムズだとは認識していなかった。騙されたような気分で私はヴィクトリア駅のプラットフォームに降り立ったのだった。

こうして初めて英国に行ってから18年を経た2008年の夏に、実に久しぶりにガトウィック経由でヴィクトリアからロンドンに入る機会があった。2000年以来ほぼ毎年のように夏期英国セミナーの引率を担当していたのだが、原油高による航空運賃高騰とポンド高の煽りを受け、この年ついに日本からロンドンへの直行便を利用することが出来なくなってしまい、あろう事かドバイ経由のエミレイツ航空になってしまったのだった。中部国際空港からドバイまでが約10時間、そしてドバイか

らガトウィックまでが約8時間だった。ドバイ国際空港もそれはそれで印象深いものではあったが、この話はまたの機会に譲ろう。

空港を出て駅にたどり着き、勉強のためと称して敢えて自動券売機を使わず、一人ずつ窓口で‘Single to London Victoria, please.’と言って切符を買わせ（四人一組で買うと約半額になるという事実を後で知った）、プラットフォームの両側に停車中のガトウィック・エクスプレス（車輦はあの頃よりずっと斬新なものに変わっていた）のうち敢えて発車時間が遅い方に乗り込んだ。これは車輦の一面を学生たちと私だけで占拠できるように、との配慮だ。なぜなら、18時間のフライト（ドバイでの乗り継ぎ時間を含めると22時間だ）で疲れているとは言え、彼ら彼女ら（特に「彼女ら」）が初めて見る英国に歓声を上げまくることが、これまでの経験から予想できたからである。他の乗客の迷惑にならぬよう、なるべく空いている車輦の片隅を占拠した。例年、ヒースロウからのバスや地下鉄の平凡な車窓風景でさえそうなのだから、ガトウィックからヴィクトリアまでの美しい田園風景では一体どんな騒ぎになってしまうのか。だが私の予想は杞憂に終わり、彼ら彼女らはそれほど大声で騒ぐこともなく、デジタルカメラを手に行儀良く、それでも目を輝かせて、窓の外と互いの顔を交互に見ながら初めてのイングランドを楽しんでいた。

学生たちと一緒にいると、すっかり忘れていた初めての英国に対する感動を思い出すことが出来る。列車が走り出して駅を出て空港を離れると、まず目に入るのが広大な田園風景だ。あまり意識されていない事実だが、イングランドの人口密度は日本のそれよりも高い。そのことを知らなくとも、イングランドがこれほど広々とした長閑な所だとは、日本人には想像し難い。日本と違って高い山がないことから、イングランドの人口は拡散していて、それゆえに都市周辺でも日本よりずっと閑散としているのだ。やがてそこに羊や牛、そして馬などが見えて来る。こんなに広い土地を誰が何のために所有しているのか、という疑問も当然湧き出てくる。

町が見えてくると、次の感動ポイントは煙突である。ほとんどの建物に煙突があるという事実、また煙突が並ぶ風景に、私はすっかり慣れてしまっているが彼ら彼女らは感動を禁じ得ない。しかも、煙突がある建物はほぼ例外なく、ヴィクトリア時代かそれよりもっと前に建てられたものであり、味わい深い煉瓦造りや石造りの建物なのである。日本で築百年といえば重要文化財に指定されるほどのものだが、ここではそういう建築物が普通に現役で使われていて、当たり前のようにそこに佇んでいるのだ。そして程なくヴィクトリアに到着してしまうのだが、その感動的な煙突の最後を飾ってくれるのが、前述のバターシー発電所である。

プラットフォームに降り立つと、いよいよ日常のロンドンだ。皆スーツケースを引きずっているの、長いプラットフォームの端をゆっくり歩いて行く。地下鉄の切符売り場まで延々と歩き、窓口の長い列に並んで（並ぶことは英国生活の重要な一部を占めるということをここで初めて実感する）ロンドン地下鉄のプリペイドカードである「オイスター・カード」を購入し（なぜ「オイスター」なのかをよく訊かれるが、いまだに答えられない）、階段を降りて地下鉄に乗る。ホテルはアールズ・コートだったので、ディストリクト・ライン（緑色の線）の西方向行きだ。初めての学生たちは、ロンドンの地下鉄が意外にバリアフリー化されていないことに驚く。これも私にとっては、今更気づかない問題点である。

最初に来たのはサークル・ライン（黄色の線）だったので、これには乗らずに見送る。次にウィンブルドン行きが来たので、三カ所ほどに分かれて乗り込む。車輦が古く汚いことやよく揺れること、また暑いのに冷房がないことに呆れる。この電車の終着駅はあのテニスで有名なウィンブルドンなのか、と訊かれるのでそうだと答える。グロスター・ロードを発車したとき、次で降りるので絶対に出遅れないように、と遠くにいる学生に伝言していると、電車が唐突に線路の途中で止まってしまう。信号待ちとも故障とも人身事故とも、何の説明もない。アールズ・コートの手前で合流があるので、ここで必ず待たされるのだ。説明が

ないことが英国流であるという事実にも、学生たちは次第に気づいて行く。

降り立ったアールズ・コート駅の駅は工事中だった。ロンドンでは、また英国では、いつもどこかが工事中だということをこうして実感し、エスカレーターのない階段をスーツケースを抱えて登り、改札を出て道を渡りホテルまで歩く。学生たちはここで初めて煉瓦色の街並みや赤い二階建てバスや黒いタクシーを間近に見て感動しているが、写真を撮る余裕はもはやない。そういえば私が初めてロンドンに来た時も、ヴィクトリアから地下鉄に乗ってこのアールズ・コートに降り立った。今回はもちろん、大学の国際交流課が旅行会社を通して手配してくれたちゃんとしたホテルに泊まるのだが、あの時は林立する安いホテル（通りの北側が割とちゃんとしたホテル、南側が安いホテルのエリアだ）を一軒ずつ訪ね歩き、一番安かったところに泊まったのだった。

ホテルにチェックインを済ませ、各自に部屋のカードキーが渡された。学生たちは若いし、初めてのロンドンなので元気だ。パブに行きたいか、と訊くと一人残らず行きたいと即答したので、一時間後にこのロビーに集合、ということにしてそれぞれの部屋に入る。パブはアールズ・コートにももちろんあるが、せっかくだから前年の引率時に見つけたテムズ川沿いの味わい深いパブまで、地下鉄に二駅ほど乗って行くことにする。前年はもちろんヒースロウからロンドン入りし、宿泊はアールズ・コートより二駅ヒースロウ寄りのハーマスミスだったのだ。パブは川沿いの、かつてウィリアム・モリスが住んでいた家の斜向いにある。この家にはモリスより前の時代に、あのルイス・キャロルの友人で、C・S・ルイスにも多大な影響を与えた作家ジョージ・マクドナルドが住んでいた。

全員で座れるテーブルを片隅に確保し、数名ずつに分かれてカウンターに注文に行く。注文時には必ず 'please' を忘れないよう注意を促す。未成年と酒を嗜まない者で、生姜が嫌いでない者には、私の好物でもあるジンジャー・ピアを勧める。これは英国以外では滅多にお目にかかれぬ伝統的

な清涼飲料である。かつてオクスフォードで、大勢の学生を連れてパブに入ったとき、ジンジャー・ピアを気に入った者が多く皆で何回もお代わりを注文したので、最後にはその店にあったジンジャー・ピアを全部飲み干してしまった、ということがあった。別な年のセミナーではこれを好きになれなかった学生が多く、「先生はなぜこんなに不味いものをいつも何杯も飲むのか」と不思議がられた。そう言えば、私が初めてロンドンに着いた頃には、一人でパブに入る勇気もなかったし、看板に「パブ」と書いてあるわけでもないので、どれがパブなのかもよくわかっていなかった。

木にかかる「青虫」

経営学部

矢田 博士

一、はじめに

本誌20号で、中国の古典においては「青虫」とは青や緑色の虫の総称であること、唐宋の詩においても「蝶蛾の幼虫」に限らず、「イナゴ」「クモ」「セミ」など、いろいろな虫が「青虫」と表現されていることを確認した⁽¹⁾。また本誌21号では、北宋・秦觀の「秋日」詩に詠われている「秋の糸を吐く青虫」が「セミ」である可能性が高いことを指摘した⁽²⁾。

本稿では、唐宋の詩に見える「青虫」の中から、木に棲息し「懸・掛・挂」という語で表現される例を取り上げ、それが何の虫を指すのか、確かめてみたい。なお、「懸・掛・挂」は、いずれも「かかる」と訓み、「ひっかかる」「ぶら下がる・垂れ下がる」「高く中空に浮かぶようにして存在